

ヒーローアッセンブル！

鋼鉄ヒーロー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

無個性で虚弱体質の僕が『ヒーロー』から力を託され、その思いに応えようと最高のヒーローを目指す話だ。

目次

僕のオリジン	1
変化	40
試験に向けて	57

僕のオリジン

「足の小指に関節が2つ、この世代じゃ珍しい何の個性も宿ってない無個性だ。残念だけれど個性の発現は諦めた方がいいですね」

あれはまだ僕が4歳の頃の話……あれは人生の中でも最悪とっていい1日だ。無個性と診断されしかも今後個性が発現することはないと断言されてしまった。あの時のシヨックと絶望は今でも忘れられない、お母さんが何かの間違いだと言わんばかりに慌てふためいていたのも今でも覚えている。無個性だけならまだよかったよ、問題はその後だ。

「そ、そんな！　どうにか……どうにかならないんですか！　出久はヒーローになるのが夢なんですよ！　正義感がとても強くて、優しい子なんです！　それなのに無個性だなんてそんな！」

「奥さんどうか落ち着いて……それともう一つ重要なお知らせがあります……出久君は虚弱体質の成長不全を患っています」

「虚弱……体質？」

「はい。今はまだ成長に問題はありませんが、おそらく7歳になる頃から成長が他の子供と比べて遅くなっていってしまうでしょう。体格や骨格、筋肉の発達も平均的なものより大きく下回る恐れもあります。知能や記憶、学習能力の方には何の影響もないだけまだマシと言えるでしょう」

「そんなあ……そんなことって！」

無個性だけでなく虚弱体質であると医師から容赦なく宣告された時はショックのあまり泣き出すことすらできず呆然としていたよ。憧れてやまないヒーローになるという夢が4歳の頃に砕かれたのだ、そんなの落ち込まない方がおかしい。

屈強な身体と個性が必要だという事は当時の僕でも理解できていた。

普通ならそこで諦めていただろう。無個性で虚弱体質、そんなハンデを抱えてなおヒーローを目指すだなんて誰も思わないだろう。

だけど……だけど僕は諦めたくなかった。どんなに危険な場面でも人を笑顔で救い出すオールマイイトに憧れた、どんなに傷ついても決して逃げ出さず人々を守るヒーロー達の姿に憧れた、彼らのようにヴィランや災害から人々を守るヒーローになりたいんだと今でも……想い憧れてしまっているんだ。

「えーお前らも既に三年生！ 本格的に将来を考えていく時期だが……大体ヒーロー科志望だよな」

教師の言葉に生徒達は当たり前だと言わんばかりに一斉に個性を発動させ騒ぎ出した。全人類の内8割の人間に超常的能力『個性』が発源したこの世界ではヒーローは漫画の中の架空ではなく、現実の職業として存在している。

世界中の人々の憧れであり、人気の職業であるヒーローを志す者は多く、この反応は当然と言えた。

「ゴリアー！ まだ授業中！ 個性は校内で発動禁止！ 抑えんか！」

テンションが上がって騒ぎ立てる生徒達を教師が叱り飛ばす。

公的な場所での個性の無断使用は法律上禁止行為にあたる。叱り飛ばし注意するのは教師として当然と言えた。

「せんせえー！ 『他の皆』とか一緒にすんなよ！ 俺はこんな、没個性、共と仲良く底辺にいく気なんかねーよ」

机の上に太々しく足を乗せ他のクラスメイトを見下すように大きな声を上げる爆豪勝己にクラスメイト達から大きなブーイングが飛ぶが気にも留めず踏ん反り帰っている。

「爆豪……お前は確か「雄英高」に志望だったな」

「マジで！ あの雄英！」

「偏差値79の超マンモス校だぞ！」

「バクゴの奴なら入れそーだな」

「個性はヒーロー向けだよなあ……個性は、だけど」

「そのざわざわがモブたる所以だ！ モブ共！ てめーらと俺は違い……オールマイトを超えて俺はトップヒーローになり必ず高額納税者ランキングに名を刻むのだ！」

「爆豪……いつも口酸っぱく言ってるがそんな人を見下した態度じゃヒーローなんかはせんぞ！ 少しは……」

「あーあーわかつてますよー『デク』の態度を見習えとか言うんでしょー行儀がいいだけの無個性の『デク』をよー！」

クラスの視線が一斉に1人の少年……緑谷出久に集まる。身長は139cmと他のクラスメイトより一回りも小さく、手足も枝のように細っそりとしており、遠目から見れば小学生と間違えてしまいそうな程ガタイが小さい。だが顔つきからはそんな体弱さを感じさせないほどしつかりとしており、強い意志が宿っているような目付きが特徴的だった。

緑谷は特に動揺せず、むしろまたかと言わんばかりの困った表情をして教師に目を向け、教師もまた爆豪が緑谷を異常に敵視している事を思い出し、しまったと言わんばかりの慌てた表情で緑谷と爆豪両方に目を向けた。

「そーいやーよおデクてめえ俺と同じ雄英高をしかもヒーロー科受けるって聞いたんだけどよお、まさかクソ雑魚のオメーが本当に雄英に受ける訳ねーよなー……無個性で障害者のお前がよー」

爆豪の発言にクラスの騒めきが更に大きくなった。

「緑谷の奴も雄英を受けるのか！」

「いくら何でも無謀だろ……」

「確かにあいつ程ヒーローって言葉似合う奴はいねーけど流石に……」

「……無個性に加えてあんな小さな体格じゃ無理だろ」

「せめてあいつに個性があったら話は違ったんだろーけどなあ」

「緑谷君……」

騒めき中に緑谷の無謀に対する軽蔑や嘲笑などはない。同情や哀憐の声は圧倒的に多い。それは彼の日頃からの行いが大きいからだ。小学生の頃から正義感が強く、虐めや暴力が行われていたら見て見ぬフリをせずそれに割って入り、イジメつ子を止めよう

とする。どんなに個性や暴力を振るわれてボロボロになっても、勝てないと分かっている。でも決して諦めず立ち向かう。

例え自分を馬鹿にし、虐めていたクラスメイトであっても助けボロボロに怪我をしながらも笑いながら手を差し伸べる姿、街中で困っている人を見つけたら積極的に声をかけて助けようとする姿勢、無個性で身体虚弱だろうと諦めず努力する姿、まっすぐな性根と高潔さすら感じられる正義感を持つ緑谷を馬鹿にする人間はこのクラスの中では爆豪を除いていなかった。

「うん。勿論受けるよ、僕もヒーローになりたいから」

「!! 俺と同じ雄英に受けるだあ? ふざけてんじゃねーぞデクウー!」

緑谷の言葉に更に騒めきが大きくなるが、それをかき消すように爆豪が個性を使って緑谷の机を爆発させ、緑谷は爆風に耐えきれず、椅子から転げ落ちた。

「無個性どころか身体も碌に成長しない貧弱なためーが何で俺と同じ土俵に立てると思ってたんだあ! ああ!!」

「同じ土俵がどうだとかそんな事君には関係ない! 小さい頃からの僕の夢だ! それ

にやってみなきゃわからないだろ！」

床に座り込んだ緑谷を見下すように罵倒する爆豪だが、真っ直ぐな強い視線で、言い返す緑谷に爆豪は更に苛立ちを強くする。

「……………!! デクの分際でそのクソ生意気な目付きを止めろって言うてんだろーがあああああ！」

緑谷の目つきに逆上した爆豪が腕を振り上げ更になぐりつけようとする。クラスから悲鳴が上がると同時に腕を振りおろそうとしたその時！

「爆豪いい加減にしろ！ 普段は大目に見ているがこの時期に個性で暴力なんか振るってみろ！ 雄英を受けるどころじゃなくなるぞ！」

担任の教師からの鋭い声に爆豪の腕が止まる。

「……………クソが」

爆豪も流石に教師の前での暴力はまずいと思ったのか舌打ちをしながら自分の席に戻っていった。

緑谷もよろつきながらも立ち上がり自分の席に戻る。

「たく……それじゃあ今から進路希望のプリントを配るから今から一ヶ月よく考えて書いてこい。以上！ あーそれと緑谷、お前は後で職員室に来なさい」

「あー……はい」

ホームルームが終わり放課後、僕は先生に再び職員室に呼び出されていた。こうして呼び出されたのは1度や2度だけではない、既に何回も呼び出され先生と話し合っている。

「なあ緑谷、お前本当に雄英を第一志希望で受けるのか？ 何度も言ってるが悪いことは言わん、止めといたほうがいい。お前の頑張りや努力は俺たち教師だけじゃない、クラスメイトや他のクラスの奴等だって皆知っている……お前自身が一番理解できてるだろ？ 自分がヒーローに向いてないってことは。」

今からでも遅くないお前なら別の道をいけるはずだ、人を助ける仕事は何もヒーローだけじゃない、医者や教師とか沢山あるだろ？ このまま無茶を続けてもただでさえ虚弱体質のお前の身体がもたない……お前の将来のためにならないぞ」

先生は僕の目をしっかりと見据えて語りかけてくる。その目とは真剣そのもの、本気で僕のことを心配してくれているんだという事が伝わってくる。こうして本気で僕のことを評価し心配してくれることがとても嬉しく感じるし申し訳なく思う……だけど答えは決まっている。

「先生ありがとうございます。でも……でも僕は諦めたくないんです！ 人々を守るヒーローになるっていう小さい頃からの夢にせめて全力でぶつかって頑張りたいたいです！ 今までの自分の努力を全てぶつけて、可能性が0に近くても無個性とか身体虚弱とかそれを理由に諦めたくないんです！ そこを曲げたら僕は……僕でなくなつてし

もう気がするんです……」

「やっぱ考えを変えるつもりはないか」

「……すいません先生、失礼します」

「……あんまり無茶はするなよ」

僕は心配する先生の視線から逃げるように職員室から出てていった。

（神様がいるっていうならアンタかなり残酷だぜ。何でここまでヒーローらしい緑谷に個性どころかちゃんとした体を与えてやらなかったんだよ）

先生とのかいわを無理やり切り上げ、そのまま帰路につこうと学校昇降口から出ようと歩いていると僕の前に立ち塞がるようにかつちゃんが睨みつけてきた。恐らく先生と僕の話が終わるまでわざわざ待ち伏せていたのだろう。

かつちゃんの相変わらずのみみつきにうんざりしながらも怯まず睨み返す。彼……爆豪勝己とは幼馴染という間柄だが、何時頃からかその関係は捻れ何故か知らないが僕の事を一方的に敵視してくるのだ。

「おいデク、まだ話は終わってねーぞ」

「かつちゃん、君が何を言おうが僕の意志を変わらないし変えるつもりもないよ。クソナードに構っている暇があるならまず自分の身の形振りから正したらどうだい？ 先生から何度も注意受けてただろ？」

そのままかつちゃんの横を通り過ぎようとするが、それを彼が許すはずもなく僕の胸ぐらを掴み勢いよく壁に叩きつけられた。腕を掴み、振り解こうと抵抗を試みるも筋力や体格の差からビクともせず、更に力を込めて僕の首を押さえつけてくる。

首元を押さえつけられ、息が上手くできずに、ジタバタと抵抗する僕をせせら笑うように口元を歪めているが目は笑っておらず、更に目つきがまるで殺人鬼のように悪く

なっている。

「つつ………！　ぐ………う」

「いつも言ってるよなあ、デク、無個性の分際で、俺よりも格下の分際で生意気にも逆らうんじやねえつてよお。テメーはいつもそうだ、勉強しか取り柄のないクソカスの分際で生意気にも俺に意見して反抗し、まるで対等のように喋りかけやがつて！　挙句の果てに俺と同じ雄英を受けるだあ！　笑い話にも何ねーよ！」

「な………何が言いたいんだ………」

「はつきり言つてやる。テメーみてーな無個性と一緒に雄英の受験を受けるのが恥だつて事だよ。名を残すトップヒーローつてのはよお、大抵学生時代から逸話や伝説を残している。そしてこの俺様も平凡な私立中学から初の雄英合格者としての箔を付けてんだわ、お前みたいな不合格確定のクソザコナード君には雄英を受けてもらいたくねー訳よ、分かるよなあ」

「………君は………大馬鹿野郎………だ」

「あ………」

何時もと同じく僕の事を心底見下した口調で罵倒してくるその内容に怒りを通り越して呆れる。確かに彼は自分と違い何でもできる才能溢れたの凄い奴だが中学三年生でここまで傲慢で酷い性格になるとは……対等な相手がおらず、周囲から褒めちぎられてきた結果がこの性格だと怒りを通り越して逆に衰れんでしまう。

「その……自分以外を……見下した言動は……いい加減に……やめといた方が……ゲホ！ ……いいよ。周りを……見下している……奴が……他のヒーローを……ましてやオール……マイトを……超えられるわけが……ない！」

僕の一言に顔を怒りに染め上げ、僕の腹を殴りつけた。碌に筋肉が付いていない腹を殴られあまりの痛みに僕は悶絶し、そのまま座り込むがかつちゃんは追撃の手を緩めず僕の背中を蹴り倒し、背中をグリグリと踏みつけてくる。個性を使わないだけまだマシンだが痛みと衝撃で碌に動く事も、声もあげる事も出来ず、ただ蹲る事しか出来ない。

「オールマイトを超えられないだあ！ ……どの口が言ってるんだよお！ ……同じ土俵に立つどころか立つ資格も無え無個性のデクがあ！ ……じゃあ俺からも言ってるよ！ ……ヒー

ローになるのに必要な個性も無え、筋肉も碌につかねえ貧相な体のデクの棒がどの口叩いてやがる！ テメーは何も持ってねえんだよ！ ヒーローになるのに必要なもんがなあ！ 他のモブどもからヒーロー『らしい』って呼ばれて調子こきやがって……所詮テメーはヒーロー『らしい』と思われてるだけだ！ 本物の『ヒーロー』だなんて一度も思われたことはねえニセモンなんだよ！」

「っ……」

「は……言い返せねよなあ……テメー自身が一番分かかってんだろお自分がヒーローにならないってなあ！ いいぜ！ 雄英を受けて見ろよ！ まあ受けたところで100%落とされるだろうがなあ！ 。周囲のモブ共もお前のことをこう慰めるだろうよ『頑張ったけどしかたない、ヒーローみたいな性格だけど肝心な個性がないんだから』ってなあ！ いいかデクよく聞いてけ！」

「テメーは！ 絶対に！ ヒーローになれねーんだよ！ 俺と違ってなあ!!」

かつちゃんは言うだけ言って気が晴れたのか、そのまま帰って行った。

(……お前はヒーローになれないか……今まで何度も言われたよ)

僕はしばらく寝つ転がったまま、天井を見続けていた。

「あー……クソ……かつちゃんめ服で見えない部分を重点的に狙って……イジメの技術ばかりあげやがってて」

体の痛みを我慢しながら、暗いトンネルの中を歩き続ける。きつと服の下は青痣だらけだろう。僕が誰かにチクらない事をいい事に、バレない範囲で暴力を振り、イジメの技術を上げるかつちゃんに内心愚痴る。こんなボロボロな体じゃ今日の特訓や筋トレ

も碌にできないだろう。

(……お前はヒーローになれない……何度も……何度も言われてきたよ!! そんな事
!)

内心から溢れて出そうになる感情を押しさえつけるように俯き顔を歪める。

クラスメイトから言われたし先生からも言われた、イジメっ子達や低学年の子達からも馬鹿にするように言われた事もある。

ヒーローになれないと自分の夢を、努力を否定される度に認めそうになってしまふ、不可能だと思ってしまう……実際そうだろう。ヒーローになるための努力を続ける度に、ヒーローの知識を身につける度に思い知らされる、自分では決してヒーローにならないと。

筋トレやトレーニング、特訓をいくらしようと僕の体は一向に成長せず筋肉も碌にかず体に疲れがたまるだけでどんなに頭を捻りトレーニングを効率よく、効果がでる方法で組んでも虚弱体質の影響で努力も実った試しがない。

それでも決して諦めずに努力し続けてきたのはオールマイトや他のヒーロー達のように人々を守るヒーローになりたいという憧れと絶対に諦めないという意地があった

からだ。

(……………そうだ……………まだ諦めてたまるもんか！ 前を向け緑谷出久！ ここまで努力してきたんだ！ 最後まで諦めるな！)

心中で自分に喝を入れパンパンと自分の頬を思いつきり叩き、何時ものように沸いてきた憂鬱な感情やマイナス思考を追い払う。

この時、自分の思考に没頭するあまり後ろから迫る脅威に僕は全く気づいていなかった。

「Sサイズのお……………隠れミノ！」

「……………え？ うぼ！」

突如として僕の後ろに現れたヘドロに押し倒され、口を塞がれる。突然の出来事に僕は成すすべなく体を拘束され、抵抗すら許されずただヘドロ特有の激臭に顔を顰めることしかできない。

「ちとサイズは小さいがむしろ都合だ。アイツを欺くには丁度いい」
「が……！ がぼぼ！ (ヴィ……ヴィラン！ やばいこのままじゃ)」

体に纏わりつくヘドロをとろうともがくがヘドロを掴めるはずがなくただもがく事しかできない。

「掴めるはずないだろお流動体何だから。このまま大人しくしてなよ、体を貰うだけだから、あと数十秒で苦しく無くなるからさあ」

「!! (クソ……息ができない……このままじゃ)」

息が出来ず、体に力も入らない。視界もぼやけてきた……ただでさえ少ない僕の体力も限界が近づいている。このまま意識を失えば奴は僕の口の中から体の中に入りこむだろう。あんな体積のヘドロヴィランに入り込まれたら僕は間違いなく死ぬ。

……頭がボーってしてきた……まずい死ぬ……？ 死ぬのか……嫌だ！ まだ僕は死ねないまだ……僕は……！ 何も……何もできてないじゃないか！

「ガ……ポ……がああああああ…… うおおおおおおお！」

「離せえええええええ！」

「！……何だ！ このガキ！ まだこんな力が残ってたのか！ クソが！ 大人しくしろ！」

僕は最後の力を振り絞り、体を、手足を動かしてもがいて抵抗する。ヘドロヴィランも暴れる僕を抑えつけようとヘドロで全身を覆おうとするが、とにかく暴れまくる。

「まだ……死ねない！ 雄英の……試験にも！ 挑戦できてない！ ヒーローを！ 目指すのに！ こんな所で……死ねるかあああああ！」

「!! 何なんだコイツ！ こんな小せえガキの何処にこんな力が！」

まだ死ねない……諦めてたまるか！ ただその一心でひたすら抵抗するが限界は近い。自分の体から段々と力が抜けていくのが分かる。ヘドロヴィランも先程より一層ヘドロの体を動かし僕を拘束しようとしてくる。

(絶対……絶対諦めてたまるか……!!)

「少年よく耐えた。そのまま動くな！」

薄暗いトンネルの中に突如男の人の声が反響した。それと同時にビュオン!! と擬音が聞こえそうなほどの鋭い勢いで円形の物体がヘドロヴィランのヘドロの体の一部を引き裂いた。それだけに留まらず更に円形の物体は勢いをましながらトンネル内の壁、天井、地面を物理法則を無視した動きで反射し続け、捕まってる僕を避けてヘドロヴィランの体を削り続けている。削られたヘドロの体は地面のあっちこっちに散らばり地面を汚している。

「う、おおおおお！ でやがったなあああああ！ 盾野郎うううう!!」

「!! 今だ！」

「……!! しま、待てこのガキいいいいいい！」

ヘドロの体が円形の物体に削られ地面に多く飛び散った事で拘束が緩まった所を無理矢理体を動かし何とか逃げ出す。が足に力が入らず、走る事ができずゴロゴロと転ん

でしまい地面に倒れ伏せてしまった。

「クソ！ こうなったらガキを人質に「させると思うか？」なあ！」

ヘドロヴィランは削れて体積が少なくなった体を動かし、地面を這いずる僕を拘束しようとするが、それよりも早く先程の声の人物が反射して飛んできた円形の物体……はなく盾を器用に掴み取りながら僕とヴィランの間に割って入った。

ヘドロヴィランは唸り声を上げ体当たりを仕掛けてくるが盾を持った男の人は盾を構えるとシールドバツシュの要領でヘドロヴィランに盾を叩きつけた。ヘドロに単純な物理攻撃が効くはずがないという僕の予想を大きく裏回り、盾を叩きつけられたヘドロヴィランは凄まじい衝撃音と共にヘドロの体をバラバラに弾き飛ばし、吹き飛んだ。

「す……すごい！ 盾一つであの厄介そうなヴィランを」

「遅れてすまない少年。大丈夫かい？ 怪我はないか？」

「……あ」

その人はまるで自由の国アメリカを象徴するかののような姿だった。青と赤と白を

ベースにした特殊部隊の様なスーツの胸元に白く輝く星のマークと、額部分にAの文字が刻まれたマスクを被り、中心に星のマークが刻まれた盾を左手に装備している、顔立ちから外国人だという事が分かる。凜とした立ち住まいと堂々と胸を張りながらも僕を心配して声をかけてくれている。僕でも見たことのない、全く知らないヒーローだった。そんな事が気にならない程ものすごくカッコよく、そして憧れるヒーローの姿だった。

「あ……ありが……」

「！ おい君大丈夫か！ しっかりするんだ！」

僕はお礼を言おうとするが体力の限界がきたのかそのまま倒れ込み目の前が暗くなかった。

「ん……あれ……ここは……公園？」

目を覚ますと僕は公園のベンチで横になっていた。気絶した僕を助けてくれたヒーローがここまで連れて来てくれたのだろうか？

空はまだ青く僕が気絶してからまだそれほど時間が経っていない事が分かる。

「やあ少年、目が覚めたようだね。安心したよ」

突如声をかけられボーっとしていた頭が冴えた。声をかけられた方を振り返ると隣のベンチでマスクを脱いでベンチに座っているヒーローがいた。

素顔をみてみると青い瞳に金髪の髪、ナイスガイという言葉がよく似合う凄いハンサムな外人さんだった。

「あああああ!! さっきのヒーロー! さ、先程は助けていただいてありがとうございます!」

「ははは、そんなに恐縮しなくてもいいよ。こちらこそ助けるのが遅くなってすまな

かったね少年。街中で暴れているのを見つけてあと一步まで追い詰めたんだが……色々あつて取り逃がしてしまつてね。あの時取り逃がしていなければ君をこんな危険な目に合わせずに済んだのだが……」

「いえいえ！ 結果的に僕も助かつてますし……あつ！ あの貴方の名前は？」

「名前？」

「ヒーローネームですよ、その……失礼なのですけど貴方みたいなヒーローは今まで見た事がなくて……最近ヒーローになられた方ですか？ どんな個性をお持ち何ですか！」

「お、落ち着いてくれ！ ちゃんと話すから……」

日本のヒーローだけでなく外国のヒーローについても調べているが彼のように盾を自在に操り、凄まじい身体能力を持ったヒーローがいるという事を僕は知らなかった。

「あ………そういえばこの世界のヒーローは人気の職業だったなあ……」

「え？」

「おつとゴホンゴホン！ ……そうさ私は最近あ……アメリカでヒーローになつたば

かりでね！ キャプテン・アメリカというんだ。個性はー……スーパーソル……じゃなく超人！ そう超人という個性でね！ 人間の潜在能力を限界まで解放する個性なんだ！」

「キャプテン・アメリカ……」

自分のヒーローネームに自分の国の名前をつけ更に長、リーダーを意味するキャプテンの名前をつけるのは並大抵の覚悟と実力ではできないだろう。

でも不思議にも疑問にも思わずむしろこの人に相応しいヒーローネームだと感じた。堂々とした立ち住まいは高潔感溢れ、僕を真っ直ぐに見つめる瞳は威圧感を感じさせない強い意志を感じる。とても最近ヒーローになったとは思えない存在感だ。

キャプテン・アメリカという名前は正しくこの人に相応しいと思わせる何かを感じられるのだ。

「さて……それじゃそろそろ行くよ、少しばかり急いでいてね。まだ空は明るいけどそろそろ暗くなる時間帯だ。ヴィランに襲われたばかりで疲れているだろう？ このまま真っ直ぐ家に帰ってゆっくり体を休めるんだ」

「あー！」

マスクを被り、盾を背中に背負うとそのまま歩き去ろうとするキャプテンアメリカに思わず僕は声をかけ、声をかけられたキャプテン・アメリカは不思議そうに此方を見る。この質問は本来なら僕がもつとも尊敬し憧れるヒーロー、オールマイトにしようと思っていた質問であつたが……何故かこの人にも聞いてみたいと……聞かなければならないと思ひ、つい口に出してしまつた。

「……個性のない僕でも……体が貧弱な僕でもヒーローになれますか？ ……人々を守る……ヒーローに！」

目を瞑り、俯向きながら返答を待つ。だが内心僕は諦めていた、彼が『なれる』というはずがないという事を。彼はプロのヒーローだ。ヴィランとの過酷な戦いや災害救助を経験しているであろう彼が無個性で体が貧弱な僕を見てなれると答えるはずがないと。

「なれるかい」

間を空けずに、迷いなく放たれた言葉に思わず僕は耳を疑った。

「……………え？」

「なれるさ。人は誰でもヒーローになれる資格を持っている。そこに能力や体格も関係ない。勿論君もだ」

人は誰でもヒーローになれる……………ときも当然のように、当たり前のように、言い放ったヒーローの青い瞳は真つすぐに僕の目を見つめている。青い瞳は『嘘』もなく『同情心』もない心からの言葉であると物語っていた。

「……………え？　ほん……………とうに？　で、でも……………だつて僕無個性ですよ！　貴方みたいに個性も持っていない……………体だつて碌に成長しない！　虚弱体質で筋肉だつてつかない、出来損ないのデクつて周囲から呼ばれてるんですよ！　ヒーローになれない！　無理だ！　不可能だ！　無駄な努力だ！　つて周りから否定されて……………馬鹿にされてきて……………なんで、そう……………なんでそんなに……………貴方はぼ、僕がいままで……………いつてもらいたかつた言葉を！　な、何でそんな……………断言できるんですか！」

「君は……成る程、かなり追い込まれていたようだね」

キャプテン・アメリカは真つ直ぐな目で僕を見つめてヒーローになると……断言した。その言葉は僕が今までずっとずつと言つてもらいたかつた言葉だった。それを本職のヒーローに言つてもらえた事が信じられず、僕は思わず取り乱し、普段溜め込んでいたものを吐き出すように喚き散らし涙を流しながらキャプテン・アメリカに八つ当たりしてしまった。情けない、自分で聞いておいて感情が上手くコントロールできない。歓喜、混乱、羞恥、怒り、不安。様々な感情が僕の心をかき乱し足に力が入らず座り込んでしまう。座り込んだ僕に視線を合わせるようキャプテン・アメリカは膝をつく。

「君の名前は？」

「……緑谷……出久です……」

「僕の名前はステイブ・ロジャース。よければ僕に聞かせてくれないかい……君の事を」

それから僕はキャプテン・アメリカ……ステイブさんに自分の過去の事や今の現状を話した。4歳の頃、無個性で虚弱体質と診断された事、それでも諦めず努力し続けた事、周囲から馬鹿にされ、いじめられても諦めなかつた事、ヒーローに相応しい人間になれるよう困っている人やいじめられている子を助けてきた事、無個性の自分にはヒーローになる資格が無いと言われたこと、僕が今まで溜め込んでいたものを……誰にも話せていなかつた事を全部吐き出すように喋る。

ステイブさんはただ黙って静かに、真剣に僕の話聞いてくれていた。

「出久……君は諦めたいのかい？ 今の君からヒーローになりたいという意志を強く感じる……が同時に今の状況にとつともない不安とストレス、迷い、疲れを感じているね。君は何故そこまでヒーローになりたい？ 周囲から不可能だと思われ自分でも心の底でそう思いながらもまだ諦めきれない。二律背反の思いを持ちながら何故そこま

でしてヒーローを志す？」

僕の話聞き終えたステイブさんが僕の目をまっすぐと見つめながら聞いてくる。まるで何かを試す様に、何かを確かめるように。

「諦めたくない……諦めたくないですよ……今まで絶対諦めない、その一心で努力してきました！　今もこの国でヴィラン達から人々を守るために戦ってるヒーロー達のように！　憧れのオールマイトのように笑顔で人々を助けるヒーローになりたい！　でも今日あのヴィランに捕まった時、僕は何もできず、抵抗する事ぐらいしかできませんでした……今日僕の幼馴染に言われたんですよ……同じ土俵に立つ資格すら持っていないデクの棒だつて……悔しいけど否定できない……できなかった……言い返せませんでした。戦う事が……守るための戦いすら出来ない僕じゃ……ヒーローになれないってそう思ってしまったんです……」

今まで誰にも……母さんにも話せなかった自分の心情を、鬱憤を、心の内を吐き出す様に話した。

「……（心が折れかかっている……だが！ 折れかかっているが心の底では諦めきれない……いや諦めていないな彼は！）」

（彼は度重なる周囲からの否定とイジメ、他の子供達とは違う特徴を持っている故の差別と悪意、無意識の見下しを常に受けてきたはずだ。私の世界の超能力者の犯罪者達もそういう背景を持った者が多かった……だが彼はそんな環境にいながらましてや無個性かつ虚弱体質のハンデを背負いながらも人を助けヴィランと戦うヒーローになるという夢を捨てず、努力し続けている！ 並大抵の覚悟と精神ではできないだろう……長年理不尽な環境にいながグレる事なく正義感や良心を保ち折れそうになっても諦めず進もうとするこの少年には素質がある！ ヒーローになるための素質が！ 本来なら彼に……オールマイトに『託す』つもりだったが……彼にも充分資格がある！）」

「緑谷出久！」

「っ！ ……はっ、はい！」

「確かに無個性で能力を持たず、体格も小さくて貧弱、鍛えても碌に成長しない体……とてもじゃないがこの世界の『職業』ヒーローを務まるとは口が裂けても言えないだが君には『ヒーロー』になるに相応しいモノを持っている」

「え？ ……だって僕無個性ですよ？ そんな僕がヒーローに相応しいモノ何て……」
「否！ 立派なモノがあるじゃないか！ 『正義感と意志の強さ』さ！ 誰かのために、助けるためにヒーローになりたいという正義感とそれを実行できる行動力。不可能だと否定され続け虐げられようと諦めず、志を忘れずに長年努力を続けてきた意志の強さ。そのどれもが君がもつ美点であり、強さの一つ……立派な個性だ！」

「あ……ああ！」

「あえてもう一度言わせてもらおう……出久……君は『ヒーロー』になれる！」

「う……うあ……あああああああああああ！」

ステイブさんの言葉が僕の心にささり染み渡っていく。慰めや同情、気遣いなどが一切含まれていない……本気の言葉に、また涙が溢れ出し、泣き出してしまった。

誰かに……夢を馬鹿にされず、同情心もなく、否定されず、ヒーローになれると本心からの言葉で言ってもらえる事が、認められる事がこんなにも嬉しく誇らしいとは思わなかった。

「出久、そんな君にだからこそ『託したいモノ』がある！」

「う・グス・託したい……モノ？ ……つてステイブさん!! か、体が透けてます！」

「……クソ……もう『時間』が来てしまったか」

さつきまでしつかりとした実体を持っていたステイブさんの体が足元から段々と透けてきている！ 驚きのあまり涙も引つ込んでしまった、ステイブさんの個性は【超人】と言っていた、透明になる個性ではないはずだ。まるでこの世界から消えようとしているみたいに少しづつ体が透明に透けてきている。

「出久！ 時間がないよく聞いてくれ！ この世界に【危機】が訪れようとしている！」
「……はい？ 危機？」

唐突に言われた言葉に嘘は感じない、が思わず聞き返してしまう。

「本来なら私達の世界の問題だったが情けないことに【此方の世界】にまで広がってしまった……今の私達では【この世界】に干渉出来ず、すぐに叩き出されてしまう！ ……

この世界にまで広がってしまった【危機】に立ち向かうことができない！ だからお願いがある！ 出久！ 私の力を受けとって欲しい！」

「え？ ……受け取るって個性を？ 何がなんだか……一体どういう」

「この力を受け取れば、君はかつてない危険と凶悪なヴィランを相手に立ち向かう事になる、だがそれと同時に君は【力】を持つ者として他の人達と同じスタートラインに立つことができる！」

「僕に【力】を……」

「私は……僕は君だからこそ！ 僕の【力】と【盾】は君になら託せると心の底から思っている！ だから君に託したい！ あとは君次第だ！ 出久……どうか選択を！」

「……ステイブ……さん」

ステイブさんの体が既に半分近くまで消えかかっている。突然の事態に正直頭が追いついていない。世界の危機だとか別の世界だとか……まるでコミックの様な話だ……普通なら信じないだろう。……だけど

「ステイブさん……お受けします！ 貴方はこんな僕にヒーローになれると……資格があると本気で言ってくれた……ヒーローになれると言ってくれた貴方の想いに応え

たい！　お願いしますキャプテン・アメリカ！　貴方の想いを背負わせてください！！」

「出久……！　ありがとうございます……では僕の手を掴んでくれ！」

「はい！」

既に消えて無くなってしまいそうなほど透明になっているステイブさんが手を差し出す。僕もステイブさんの手を握手する形で掴もうとする。

「……出久……すまないが言い忘れていた。君なら耐えられるとは思うが一応伝えておくよ」

「はい？」

「……死ぬほど痛いぞ」

ステイブさんの手を掴んだ瞬間、凄まじい何か体が体に入り込むと同時に激痛が全身を包み、目の前が暗くなる。僕は再び気絶してしまった。

「……………い……………お……………い……………おい君！ 大丈夫か！ しつかりするんだ！」

「う……………ん？ ……ステイブさん！」

「うおー！」

がぼり！ と体を勢いよく起こし夜になりすつかり暗くなった公園を見渡すが既にステイブさんの姿は見当たらず、足元には託された物の一つである円形のシールドが置いてあった。「力」を託された際の激痛で気絶してしまった間にステイブさんは本来の世界に帰ってしまったのだろう。

気絶していた僕に声をかけてくれた警察官が突然起き上がった僕に驚きながらも警戒しながら此方を見ている。

それにしても明かり一つない夜中の公園の中だというのによく視える。

「お、おい君大丈夫か！ 一体何があったんだ！ ヴィランに襲われたのか？ 怪我はないか！」

「いえ……大丈夫です。えーと、ちよつと気分が悪くなって横になってたんですよ。そしたらいつのまにか寝ちやつて……」

「……いやいや嘘は良くないぞ！ そんなに制服がボロボロの状態に加えほぼ半裸の状態で地面でただ横になっていただけはありえないだろ！ まさかいじめか！」

「ボロボロ……半裸？（ヘッドロヴィランに襲われた時のか？ でも半裸になるほどボロボロじゃなかったぞ？）」

……

此方を訝しげに見る警察官の言葉に違和感を覚えた僕は自分の体を確認してみると

「……っつ!! なつななな何だコレエ！」

僕の体がとてつもない変化を……いや、もはや生まれ変わったと言えるほどの変異を
とげていた。

枝のように細く碌に筋肉がついていなかった腕が、以前と比べ物にならない程の強靱な筋肉に包まれた丸太のように大きく立派な腕へと変化し、肋骨がうっすらと浮き出ている程肉がついていなかった胸部やお腹周りは、ガチガチに鍛えられたかのような胸筋

とシックスパックに割れた腹筋に変化している……よくよく体を見ていると体の筋肉どころか体格、骨格、身長、手足の長さ、僕の体の全てが以前と比べられない程変化していた。

「……………これがステイブさんが……僕に託してくれた力なのか……」

「おい！ ……君！ ……いきなり大きな声を出してどうしたんだ！ ……おい！ ……クソ！ ……やはりヴィランに襲われていたのか……！ ……個性の影響か？ ……ともかく早く病院に連絡を……！」

自分の予想以上の劇的な変化に頭が追いつかず自分のすぐ隣で騒ぐ声を無視して放心したかのように暫く座り込んでいた。

変化

「お、おとおおとおおとおおとおお!! 何だこの肉体は! 素晴らしい……いや喜ばしいというべきか! 個性因子の覚醒や個性の能力による肉体の変化ではない! 『無個性』だ! 君は『無個性』の状態でその人間の極致と言える素晴らしい肉体と超人的身体機能に進化し、なおかつ未だに成長の余地を残している! いやはやこれを進化というべきか突然変異というべきか! 緑谷くん!! 君はこの世界で初の個性因子以外の何らかの突然変異によって誕生した新・人・類だああああああああ!!」

「は……はあ……」

「これは重大かつ大変な発見……! いや新たな人類の歴史の節目に私達はいるのでよ!! 数世紀以前の個性誕生以来の大いなる躍進! 人類の新たる一步だ! 過去の学者達によつて散々議論され尽くされ、そして予想されていた『個性とは異なる力を持つた新人類の誕生の可能性』!! それが君だ!! 君はその新人類の偉大なる一人目なのだよおとおおとおお!!」

(う……うるさ……)

あの後警察官に呼ばれた救急車で病院まで担ぎ込まれ、検査を受けてる最中に身元確認で僕が貧相で貧弱な肉体から、強靱で凄まじい筋肉の鎧に包まれた肉体へと変化してゐる事が病院側にバレてすぐに都内の大型病院に移され、精密検査を受けさせられて体の至る所を調べ尽くされた。

そして精密検査の結果を医学者から聞いている最中だが……医学者は新たな発見に狂喜乱舞している。結果は個性の覚醒ではなく……個性因子が一切関わらない進化または突然変異であると結論づけたらしい。

ステイブさんから受け取った【力】による身体の急激な変化は、本当に【個性】由来のものでなかった事に驚いている。

ここで実は異世界から来たヒーローから【個性】とは異なる【力】を受け継いで今の体になりました！ って言っても絶対信じられないだろうし下手したら精神病院送りにされるかも知れないから黙っておくことにした。

(ステイブさんは別の世界から来たって言ってたなあ。世界が違つてヒーローの能力の原理も違つてくるのか……興味深いなあ)

「ふ——……さて……うん落ち着いた見苦しい所を見せてすまなかつたね緑谷くん今言った通り君は『個性』とは全く異なる超常的能力に目覚め突然変異を遂げた新たな人類だが……君には大変申し訳ないが暫くの間は遅咲きの『個性』に覚醒した！ という事にしておいて欲しい」

「……え？ ……発表しないんですか？」

廃テンションから一転し急に冷静な状態になった医学者の言葉に驚く。さつきまでの廃テンション具合からすぐにでも世界に向けて発表しよう！ と言いつ出しそうだと思っていたが。

「君も知っているだろうが、かつてまだ『個性』が社会の常識ではない時代……『超常黎明期』に無個性と個性持ちで大きな争いや差別があつただろう？ 数世紀の時を経た今では『個性』はほぼ全ての人間に発現するようになり常識の一部になつた。だが君は『個性』を必要とせず超人的肉体を手に入れた『未知の突然変異』に至つた……いや至つてしまつたというべきか。我々人間は自分が理解できないモノや自分の立場を脅かすかもしれないモノを積極的に排除しようとする傾向にあるのは君も知つての通りだね

…言うては何だが今まさに君がその排除、もしくは差別の対象になる恐れがあるんだ」
「…あつ…」

医学者の言葉に思わず口を開けた。今まで僕は『無個性』だったが今は違う。ステイブさんから『個性』とは異なる【力】を託された僕は『無個性』でもなければ『個性』を持った人間でもない…全く別種の超常的能力を持った、今現在この世界に置いてただ一人の人間だ。

「非常に残念な事に君という新人類がその差別の対象に…最悪の場合君の存在を皮切りに第2の超常黎明期が勃発する可能性があり得るのが今の人類の現状さ…既に今回の件を知った政府から各医療機関や警察上層部、ヒーロー上層部に内密に伝え働きかけている。君に無断でこの様な事をしてしまったのはすまないと思っっているが理解してほしい…君の存在はそれ程までに今の社会に大きな刺激をあたえかねないんだ」

医学者の言葉でようやく事の重大性に理解した。ステイブさんから授かった【力】は世界に大きな混乱の元になる事…数世紀前の暗黒時代の再来を医学者さんは危惧しているんだ。

学校でも超常黎明期に起こった凄惨な事件や歴史的な事件の数々を習っていたのと、元々無個性であったが故に受けた差別やイジメを身をもって体験しているために嫌でも理解できてしまった。政府だけでなく警察やヒーローまでも秘密裏に動いているとなれば裏ではかなりの大事として扱われているのだろう。

：よくよく考えれば公表しない方が僕にとつてもメリツトの方が多い。ステイプさんが警告していた世界の危機がまだどんなモノか分からない以上迂闊に僕の「力」の存在を公表せずに個性の発現に留めていた方がいいだろう。

「いえ…大丈夫です。そちらの方が僕も助かります。…：所でいつ家に帰れるんですか？ 昨日から一晩経つてて母さんも心配してると思いますが…：そろそろ連絡をとりたいんですけど…」

「いやいやいや！ 家に帰る何てとんでもない！ 最低後一ヶ月はここで缶詰めさ！

もう少し君の体や変異ついて詳しくデータをとらないと行けないし、政府の手回しもまだ終わっていないからね。学校側や君の家族には重要な部分を端折って説明してあるから心配いらん！ …あ、君のお母さんもうこの病院に来てるぞ、一応君が泊まる予定の病室に通しておいたけど滅茶苦茶心配してたよ、だから早く会って安心させてあげなさい」

「……えええええ！　母さん来てたんですか！　なんで早く言ってくれなかったんですか！」

「いやねーまだ精密検査の最中だったし……べ、別に検査のデータに夢中で忘れてたわけじゃないよ」

「言い訳はいいですから！　僕の病室は何処ですか！」

「最上階の特別患者病棟、01号室さ。病院内を走つちや駄目だぞー！」

僕は検査室を急いで出て最上階まで急ぐ。

それにしても不思議だ、139cmの低身長から一気に178cmと大きく伸びたというのに何の違和感もなく歩くことができている。普通なら急激なバランスの変化や視点の変化、身体の成長について行けずに歩く事が難しくなる筈。なのに違和感すら感じさせずまるで今の体が正常だと錯覚してしまうほど今の状態に僕が馴染んでいるのだ。

お母さんがいる病室まで早歩きで急いでいる最中ふと廊下に設置してある大きな鏡を見つ鏡に映る自分の顔を見て足を止めた。

「……全然違うなあ」

やはり改めて見ると以前の自分とは思えない程の変化ぶりだ。突然変異と言われても納得が行くほどに。顔付きは以前の面影を残しながら少し大人びた顔立ちに変化し、特徴的だったそばかすが綺麗さっぱりなくなっている。

体格も身長も顔付きも…以前の自分からの余りの変化を改めて見て少し不安になった…母さんは僕をちゃんと「緑谷出久」と認識してくれるだろうか？。もしかしたら拒絶されるかも…

「……僕が母さんを信じないでどうするんだ」

いつもの様に心の中沸いた不安と自分への嫌悪を払うように頬を思いっきり叩いて再び歩き出す。今度は病室まで歩みが止まる事はなかった。

最上階の病室前にたどり着いた僕は軽く深呼吸を大きく鳴り響く心臓音を押さえつけ意を決して病室内に入る。

「母さん」

病室の中で不安そうに顔を歪めて俯きながら椅子に座っていた母さんに声をかける、僕が声を掛けるまで入ってきた事すらきき取ってなかったのかビクリ！と体を大きく揺らしながら僕の方を見る。

「……………あーえつとその…僕の事分かる？」

「……………出久？ ……」

母さんは大きく変貌した僕を一目見て驚愕で目を見開きながらもしつかりと僕の事を緑谷出久であると認識しながら僕の胸に飛び込んで来たため慌てて受け止めた。

「ちよっ！ うわ！ 母さん！」

「出久うううううううううう！ し、心配したのよおおおお！ 大丈夫!! 痛い所はない!! 黒い服の人達と警察の人達が急に家にきて、前代未聞の個性の遅咲き覚醒して緊急入院したって聞いて！ い、居ても立っても居られなくて！ そ、それで」

「母さん！ 大丈夫だから少し落ち着いて！ ね？」

以前より大きくなった僕の胸の中で滝の様な涙を流しながら僕の事を心配し泣いて

くれる母さんに：僕を緑谷出久として拒絶せず受け入れてくれた母さんに内心で感謝しながら泣き続ける母さんを宥め続けた。

「言うのは何だけど…よく僕が一目で分かったね」

「グス…もう…私が自分の息子を見間違えるわけがないじゃない！ 私も最初は驚いちゃったわよ。身長から体格までまるで昨日とは別人！。正直混乱しちゃったわ：けどね…不安そうな表情は相変わらず以前そのままで…出久も今の状態が不安なんだった」

あれからギャン泣きした母さんの涙で服をびしょ濡れにしながらも何とか宥め落ち着かせて、今の僕の状態を改めて僕から説明しているところだ。勿論僕が新人類に分類された事は伝えずに個性が覚醒した事になっている。

「あ、出久！ そういえば警察の人が出久の事を伝えに家に来た時に学校の鞆と一緒に

大きな金属の盾を渡されたけどあれは何？ 家にもあんな盾なかったと思うけど」

お母さんに盾の事をしてきされて思わず「あー…」と言葉を濁す。

警察の人にも同じ事を聞かれて自分の持ち物ですと言った時も滅茶苦茶訝しがら、誤魔化すのが大変だった。結局コスプレ用のアイテムと説明して警察の人達から生暖かい目で「ああそういう年頃だからねえ」と言われた時は何とも恥ずかしい気持ちになった。警察の人には自分の持ち物と誤魔化したが母さん相手じゃその誤魔化しも効かない、一部を省いて伝える事にした。

「あの盾？ あれはね…託されたんだ」

「託された？」

「うん、昨日個性が発現して気絶する前にね…ヒーローにあっただんだ！ とつても強くて、かつこよくて、僕が憧れるヒーローを体現してるような人だったよ。その人がねヒーローになれるって…誰にも資格があるって、僕が無個性で体が弱いのを知った上で本気で言ってくれてこの盾を託してくれたんだ」

「…ヒーローに…言ってもらえたの…？」

「うん！ 初めてだったんだ！ 僕の夢を笑わないで…否定しないでヒーローになれるっ

て言ってもらえたのが……だから母さん僕これからもっと頑張るよ！ ヒーローになれるように！ その人が僕に言ってくれた言葉を実現できる様に！」

盾と【力】：ステイブさんがキャプテン・アメリカとして活動するのに重要かつ必要不可欠なモノとこの世界にやがて訪れるという【危機】に立ち向かう使命を僕を信じ託してくれた。ならやる事は決まっている！ 今まで以上に努力し、ヒーローになりステイブさんの代わりに【危機】に立ち向かう事だ。

大きく目を見開き驚く母さんに僕はにと笑いかけるのだった。

緑谷出久がキャプテン・アメリカに力を託され、入院して早くも一ヶ月が過ぎた頃、緑谷のクラスではある話題で持ちきりだ。個性が遅咲き発現した緑谷が一ヶ月ぶりに復学するという事にだ。平々凡々な中学校から前代未聞の個性の遅咲き発現を成し遂げた緑谷は本人の与り知らぬ所で一躍ブチ有名人に押し上げていたのだ。

「なあ、緑谷ってどんな個性が出たんだろうなあ」

「こんなに話題になるくらいだきつとすげー個性に違いねえって！」

「個性次第じゃまじで雄英狙えるんじゃないか！ 緑谷の奴！」

「でも発現したばっかの個性なんか使いこなせるのか？」

「できるわよ緑谷くんなら！ 個性やヒーローの事にも凄く詳しいのよ？ きつとパツと使いこなして凄いヒーローになれるわよ！」

「・ 案外没個性だったりしてな」

「あーありえるな、身体虚弱で没個性・ 前と変わらねえな」

「むしろ無個性の方がまだ個性的だな」

「おいその言い方ねえだろ！」

「流石に酷すぎ！」

「そうよ！ 緑谷くんならきつと凄いヒーローみたいな個性が発現するんだから！」

「…ツン子さあ…：そういや前からやけに緑谷の肩持つけどもしかして！ 緑谷の事す」

「ちっ!! ちちち違うから！ 緑谷くんはそそそその!! 小学生の頃いじめから助けてもらってからその…：そ、尊敬してるだけなんだからあ!! 好きだとかそんなんじゃないんだからね！」

「あーはいはいソウナンダー、ツン子ちゃんはソンケイシテルンダー緑谷のコトー、ぜんぜんきずかなかったなー」

「典型的ツンデレ言動乙」

「かわいい！（顔真っ赤で慌てて弁明しても説得力ないぞ…ツン子よ）」

「つつ!!　　ゝゝゝ人おちよくつてとぶつ飛ばすわよ——！」

「わ——!!　暴力反対！」

「お、お前個性は反則だろ——！」

「……………チツ……………」

クラス全体が緑谷の事で大盛り上がりの中1人だけ始終不機嫌の男がいた、

爆豪勝己だ。一ヶ月前突如入院した緑谷に爆豪は心配すらせずむしろ清々した気分でごしていた。視界に入るだけで不快な奴が消えたのだ、むしろこのまま一生消え失せろとすら思っていた。だがつい最近になって緑谷が入院した理由を教師から聞かされ愕然とした。あの無個性で出来損ないと見下していたデクに個性が発現したのだと、嬉しそうに語る担任教師に爆豪は思わず呆然とした。それ以来クラス全体…どころか学校全体で緑谷の個性の話題で持ちきりでそれが爆豪の機嫌を更に悪くしているのだ。

（ケツ…デクが個性を発現させたなあ？ ……くだらねえどうせ没個性に決まってんだろ。前代未聞だがなんだか知らねーが例え個性をてに手に入れてろうが貧弱モヤシがヒーローになれる訳がねえ！）

「なあなあ爆豪！ 緑谷の奴がどんな個せ」

「俺にデクの話振ってんじゃねえ！ ぶち殺すぞ!! クソモブが！」

「ヒイ！ すんませんっした——！」

軽率にも爆豪に緑谷の話題を振ったクラスメイトは怒鳴り散らされ、爆破の個性で脅されて一目散に逃げていく。その情けない後ろ姿に爆豪は更に機嫌を悪くし無意識の内に殺気を撒き散らす。その殺気に当てられた近くにいた生徒達が逃げ出す程だ。とてもヒーローを目指す中学生がだしていいものではない。

（あ~~~~~くだらねえ、気に食わねえ、ウゼエ！ 個性使えば少しは静かになるかあ！）

緑谷の事になると考えが稚拙になるところかヴィラン的言動になる爆豪の我慢はとつくに限界を迎えていた。個性を使ってクラスメイトのモブ共を黙らせてやろうかと物騒な考えを始めた時、担任の教師が入ってきた。

「お前らとつくに予鈴鳴ってるぞ！ ホームルームの時間だ！ 喋るのやめて早よ席につけ！」

教師に怒鳴られた生徒達が慌てて席に戻っていき、教師が教卓の前に立つ。

「お前らにこの前言ったように今日から緑谷が病院から退院し復学するわけだg 先生！ 緑谷くんは大丈夫何ですか！」「どんな個性が発現してたんすか！」「異形系の個性とか？」「てかもう学校にきてるん？」「おいこら！ まだ喋ってるだろうが！ 静かにせんか！ ……たく…今言った通り緑谷が今日から復学する。最初に言っとくがお前らどんなに驚いても大声出すなよ！ 今は朝のホームルーム中…他のクラスに迷惑だからな！」

教師の言葉に更に騒めきが大きくなった。教師がその様に注意すると言う事は教師

にそう言わせる程に緑谷の外見が変わっていると言う事だ。

「センサー、緑谷の奴そんなに姿変わってんすか？ やっぱり異形系？」

「しゃべるなって言ってるんだろ…ああ俺もさつき会ったばつかだったが正直かなり驚いた。いいか！ 緑谷の個性の事については休憩時間に本人から聞けよ！ 緑谷入っていいぞ」

クラス全員の視線が集中した教室入り口から入ってきた緑谷の姿を見てクラス全員が驚愕した。当然だろう、以前までのよく知る貧弱な姿から一転、大人と見間違える程ガタイがいい体格と身長、大人びた顔立ちに変貌していたのだから。

まるで子供から大人に一気に成長したかの様な姿にクラスメイトは勿論、爆豪すら言葉を失っていた。

緑谷は慣れない視線と今の自分を見られている事に緊張してるのかぎこちない笑顔でクラスに顔を向けている。

「えっと…今日からまた復学しました。個性が発現して見慣れない姿になっちゃったけどまた改めてよろしくね」

『『『……ええええええええええええええええええ!!』』』』

(……まああんな変わり様見せられて黙ってろっていうのも無理な話だよな)

担任教師は個性が発現した緑谷の姿を見て年柄もなく叫んだ時の事を思い出しながら耳を押さえてやれやれと首を振るのだった。

試験に向けて

ホームルームが終わり先生が教室を出て行くと同時にクラスメイト達が自分の席に座っていた僕の周りを囲み質問が四方八方から飛んできた。

「お、お前まじで緑谷か！ 別人じゃねーか！」

「いったい何の個性に目覚めたんだよ！」

「大人になる個性か！」

「ゴンさんかよ！」

「いや誰だよ」

「虚弱体質はどうしたんだよ！」

「筋肉すげーな、ちよつと触らせてくれ」

「腕も太い、まるで丸太だ」

「何cm伸びたんだ！ 大人並みじゃねーか！」

「うわ緑谷めっちゃ大人っぽくなってるとじゃん」

「…カツコいい…」

「おいツン子！ 愛しのが緑谷すげー事になつてるぞ…おーいツン子？ ……見ほれてやがる」

「ヤベー！ まじすげーな！」

みんなが一齐に話してしているのに誰が喋りかけてくるのか、誰が喋っているのかがはつきりわかる。まるで聖徳太子になった気分だ…カツコいいとか初めて言われた…なんか照れ臭いな。

体を触られたり、みんなに揉みくちやにされながらしやべりかねていると大きな爆発音が鳴り響き教室が静まり返る。教室内で平気で個性を使う人物何てー人しかいない、かつちゃんの手平から小さな爆発を連続的に起こしながら、僕に近づいてくる。

「よおデク、随分とご立派な姿になったじゃねーか。自分の情けない姿に悲観して改造手術でもしてもらったのかあ？」

何が気に食わないのか、かつちゃんはクラスメイトを押しどけて僕の目の前までくると何時ものように人を殺せそうな目つきで睨みつけてきながら煽ってくる。

「…そんなわけないだろ僕にも個性が出たんだ。聞いただろうけど遅咲きの個性発現さ」

「へえ…無個性のデクに個性がねえ…どんな個性だよ、虚弱体質の貧弱もやしがそんな姿になれる筈がねえ、どうせ発現したばかりの個性で姿でも変えてんだろお？ 恥かく前に元の情けねえ姿に戻ったらどうだよ」

どうやらかつちゃんは僕が個性で今の姿に変身していると思っっているようだ。まあつい最近までチビで貧弱だった僕がいきなり筋肉隆々な姿になってたらず変形型、変身型の個性を思い浮かべるのは当然だろう。だが今の僕の姿は変身でも見掛け倒しでもない。

「お生憎様、個性が発現してから今の姿になったんだ。『超人』って個性が発現してからね」

僕が発現した個性の名前（正確には個性じゃないけど）を言うときさつきまで静まり返っていたクラスが再びざわめき始める。

「な…なあ緑谷、超人の個性ってどんな事ができるんだ？」

クラスメイトの1人がイラつくかつちやんの様子をちらちらと伺いながらおずおずと質問してくる。

「えーと…：医学者の人が言うには変異型と常時発動型の特性が合わさった複合型の個性らしくて、人間の持ち得る潜在能力を最大限までに引き出す個性なんだ。つい最近まで貧弱だった僕が今の姿になったのも超人の個性のおかげらしくて、僕の体の中の潜在能力が一気に引き出された影響なんだって」

「そ、それじゃあ虚弱体質はもう大丈夫なのか？」

「うん、個性が発現した影響でもうなくなっただって」

「おおおお！ まじか！ よかったじゃねーか！」

「個性の発現に加えて虚弱体質克服ってすげーじゃねーか！」

「こりやマジで目指せるじゃねーかよ英雄を！」

「前の緑谷じゃ到底無理だったろうけど、今の緑谷なら行けるぜ！」

僕が個性の詳細と虚弱体質の克服した事を告げると、クラスの皆は自分のことに喜び祝ってくれた。個性が出た事を祝ってくれるのは純粹に嬉しいが、悪気がないとはいえ以前の自分では無理だと容赦なく言われるとやつぱり落ち込む…クラスメイト達が喜んでくれている中、かつちゃんだけはニヤニヤと僕を見つめてくる…嫌な予感しかしない。

「超人？ …デクが？ …ハツ…デクの棒のテメーには似合わねー言葉だなオイ！ 何処が超人か証明してみせろやテメーの体でなあ！」

（…い… おいマジか！ 皆がまだ近くににいるだろ！）

皆が騒ぎ立てる中、かつちゃんは右腕を大きく振り上げ僕に向かって右手を突き出すうとして、この動作はかつちゃんが爆破の個性を使う動きだ。

まだ僕の周りに他のクラスメイト達がいるのにだ…！ どうやら今のかつちゃんは周りが見えなくなるほど、僕にきれてるらしい。

（避けたら周りの皆に被害が及ぶ…だったら！）

かっちゃん腕を完全に伸ばしきる前に素早く椅子から立ち上がり、机から身を乗り出すとかっちゃんの右腕を掴み上げると同時に右肩を押さえつけ、僕の机の上に叩きつけるように上から体ごと押さえ込み動きを封じ上げる。

僕が反撃してくるとは、露とも思っていなかったのか余りにも隙だらけな動作だった事に加えてリーチの差、体格の差で簡単に押さえ込みことができた。

「ぐは!! つつ! テ、テメエ! デク! 離しやがれ!」

「かっちゃん! 急に何するんだよ! 危ないだろ!」

「クソがクソがクソがあ!! ふざけんなクソがあ!! デクの分際で! 俺に触れてんじゃねー! ぶち殺すぞ!」

「…相変わらず滅茶苦茶な!」

(前まで手も足も出なかったかっちゃんをこんな簡単に押さえ込めるなんて…やっぱすごいなこの体)

無茶苦茶な事を言いながら拘束から逃れようと体を必死に動かすかっちゃんを体全体で更に力を込めて押さえ込みながら、今の自分の力に驚愕する。入院していた一ヶ月

間で、体の検査に加えて身体能力テストなどである程度、今の自分の身体能力を把握していたが、あのかっちゃんを、こうも簡単に押さえつけられているという事が自分でも信じられなかった。

(あー…押さえ込んだはいいいけど、どうしよ…このまま離してもまた襲いかかってくるよな)

かっちゃんを押さえつけた際にクラスの皆はずでに巻き込まれないよう距離を取っている。僕としてはこれ以上かっちゃんと喧嘩をするつもりはないが、手を離せばまた襲いかかってくるのは目に見えてるし、僕が止めろと言っても逆上してますます暴れまわるだろう。

このまま喧嘩を、しかも個性を使ったと先生に知られたら、来年の雄英の受験に悪い影響が出るだろう…爆発的なみみっちさを持つかっちゃんが分からない筈がないのだが。

(一体僕の何が気に食わないんだよ…)

「いい加減…離れろや!」

「っ！」

僕の拘束が緩んだ一隙を狙って、かつちゃんは両の掌から大きな爆発をおこし、その衝撃を使って無理やり僕の拘束から逃れ、距離を取った。

かつちゃんは先程よりもギラついた目で僕を睨んでくる、こうなったかつちゃんは止まらないだろう。

「道端の石ころ風情があゝ調子乗ってんじやねえぞデク！」

「かつちゃん止めろって！ これ以上個性を使うとマジで洒落にならないぞ！」

「洒落にならねえだあ？ ざけんなクソが！ 体がでかくなつた程度で俺に勝てると思ってるのか？ 調子乗りやがって！ テメエは…無個性で、口だけのクソナードだろうが！ 見下してんじやねーぞお前が下なんだよお！」

「なっ！ 何でそうなるんだよ！ 見下した事なんて今まで一度もないだろう！」

「黙れや！ そのクソムカつく目もテメーの態度にもうんざりだ！」

制止を呼びかけるもかつちゃんには逆効果でますます怒りをつのらせて、今にも飛び出さんと身構えている。

（かつちゃんには絡まれるとは思ってたけど流石にすぐに喧嘩になるなんて思ってもいなかったよ！ クソ！）

復学早々にステイブさんから受け継いだ力をこんなくだらない喧嘩に使うことに内心嘆きながら、ボクシングスタイルの構えでかつちゃんをいつでも迎え打てるよう構える。

「ち、ちよつと待ってって2人とも！ 喧嘩は止めろって！」

「そうよ！ 個性を使って喧嘩した何て知れたら雄英を受けるところじゃなくなるわよ！」

「バクゴーも落ち着けて！」

一触即発、今にでも殴り合いに発展しそうな雰囲気の中、流石にまずいと思ったのかクラスメイト達が喧嘩を止めようと間に割って入って来てくれた。

「何だモブ共が！ 邪魔すr 爆豪！ あんたもいい加減にしなさいよ！ 雄英の受験

「が受けられなくなってもいいわけ！」ああ!?! なんだとお…」

「そうだけ爆豪、この時期に喧嘩はまずいつて…お前ら2人のためにもならないつて…落ち着こうぜ…な？」

クラスメイト達の正論に怒りで体を震わせているが、多少頭が冷えて冷静になったのか、構えを解いたが未だに僕を睨みつけてくる。

「つつつ…ああ…クソが！。おいデク！ まさかあの時の言葉を忘れたわけじゃねーよなあ！ 個性が発現した所でお前は木偶の坊の『デク』」

だ！ 心の底で諦めてたテメエが今更ヒーローになれるわけがねえんだよ！」

「っ！ ……そんな事はない！」

クラスメイト達が僕が言い返した事に驚いた顔で僕を見る。僕がかつちやんの火に油を注ぐ行為をした事に驚いているのだろう、だが言い返さずに入られなかった。ステイブさんが…キャプテン・アメリカが僕にヒーローになれると言ってくれた、僕を信じて「力」を託してくれた、スタートラインに立つ権利を与えてくれたんだ。

「個性が発現する前の…諦めかけてた僕に『ヒーロー』が言ってくれたんだ！ヒーローになれるって、その資格は誰にでもあるんだって！ だから僕はもう諦めない！ 個性が発現したからヒーローを目指すんじゃない！ ヒーローになれると言ってくれたあの『ヒーロー』の想いに答えるために…僕がヒーローになれると信じてくれたあの人の想いに応えるためにヒーローを目指すんだ！」

ヴィランの様な目つきで睨んでくるかっちゃん目の目を見据え、言い返す。

しばらく睨み合いが続いたがかっちゃんは大きく舌打ちをして自分の席に戻っていき、クラスから緊張感が解けた安堵からため息が辺りから聞こえた。

「……フウ…みんなごめん助かったよ」

「いいっていいって！ それよりさつきすごかったな！ あの爆豪を一瞬でバツ！ と押さえつけて！ 最初早すぎて何してるのかわからなかったぜ！」

「馬鹿お前！ せっかく爆豪が収まったのにまた爆発したらどうすんだ！」

「でも流石個性が超人て言うだけあるよなあ、すげースピードだったぜ」

「今じゃ爆豪と喧嘩しても勝てるんじゃないのか！」

「あー…どうだろうね、まだ個性が発現したばかりで、今の体に完全に慣れきっては
ないんだよ」

「それってまだ慣れきってない個性で爆豪をあつさり押さえ込んだってことじゃん！
やっぱスゲーって！」

（おーい…みんな！ わざとじゃないよね！ 絶対かつちゃんに聞こえてるって！ う
わあ…かつちゃんが凄いや顔でこっち見てるし…）

此方を最早ヴィランと言ってもいい程凶悪な表情で睨みつけてくるかつちゃんに内
心焦りながらも、答えられる範囲で皆の質問に答えていった。

緑谷が病院から復学し、爆豪とのいざこざから早くも五ヶ月がたった。

緑谷は真冬の夜中に、ゴミが大量に不法投棄された海沿いのとある海浜公園で山の様
に積み立てられたゴミを足場に全力疾走で駆け抜けていた。

パルクールを彷彿とさせる動きで暗闇の中、常人では明かりなしでは到底歩けないような不安定なゴミ山の中と砂の足場を飛び跳ねまわり、走り抜けながら右手に装備していたラウンドシールドを手に取り赤い丸印の付いた冷蔵庫に向けて最低限の動作で投擲、正確に投擲されたシールドは赤い丸印部分にぶつかり冷蔵庫に大きな凹みを作りながら反射し跳ね返ってくる。

「25個目！ 次！」

全力疾走する緑谷は自分の元に跳ね返ってきたシールドを掴むと今度はゴミ山の上のヴィランに見立てたくず鉄で出来たカカシに向かってシールドを投擲、ぶつかつたシールドは反射して再び手元に戻る…かと思われたが、反射どころかカカシを真つ二つに切断してしまいシールドは勢いよくゴミ山の向こう側に飛んでいってしまった。

「やばー！ 力加減間違えた！」

緑谷は飛んでいってしまったシールドを探しに慌ててゴミ山を駆け上る。

緑谷が今何をしているかというの特訓である。自身の身体能力を理解し、シールドを

使いこなすために丁度いい特訓場所である人が寄りつかない海兵公園で全力で体を動かす特訓に力を注いでいたのだ。

「全力で動きながらの投擲はまだ力加減が難しいな。反射の計算自体は完璧だけど少しでも力加減や回転のかけ具合を間違えると鉄を容易く切断する凶器になってしまう。ヴィラン相手だと無意識に手加減できるけど物だと遠慮なくやっちゃうからなあ。ちゃんとした力加減とこのシールドの特性を考慮した投擲方を覚えないと。だけど体の使い方はだいたい分かってきたぞ。パルクールを調べておいて正解だった、体の使い方と自分の身体の動きの限界を知るのにも最適だ。マーシャルアーツの方も力を入れていかないといくら身体能力が高くても技術が素人じゃ無駄になってしまう…次の日は…ブツブツ」

ゴミの山の中に紛れたシールドを回収しゴミのない開けた砂場まで歩きながブツブツと呟き、幾つもの付箋が付いたメモ帳に改善点や次の課題を書きながっていく。

「……しかし本当すごいなこのシールド…軽くて頑丈、弾力性も高い、どんな衝撃も通さず吸収して内側に留めておくなんて…一体どんな素材でできてるんだろう？」

緑谷はステイブから託されシールドを見て既に何度も思った疑問を口に出しながら不思議そうにシールドを見る。

特訓初日にステイブさんがしたようにシールドを投げて反射できるかやってみようとして投げてみるとまるでピンボールの様に普通ではありえない物理法則を無視した挙動で壁や床を反射して跳ね回った挙句、シールドが背中に直撃し悶絶したのも記憶に新しい。

あれから何度もシールドを投げて挙動を観察し、衝撃を完全に吸収し内側に留める特性和、留めていた衝撃を外に放出するという2つの特性を持った盾であることが分かり、その特性を計算の内に入れて幾度となく訓練や実戦を重ね、つい最近漸く壁や物に反射して自分の手元に戻る様に出来てきたのだが、このシールドを完璧に投擲できるようになるにはまだ時間がかかるだろう。

こんなトンデモシールドを自在に操って見せたキャプテン・アメリカの技量の凄さに脱帽しながらふと左手の腕時計を見た。

「…つてやばー！ もう9時過ぎてるじゃないか！ 門限の10時をすぎたら母さんにまた怒られる！」

以前、特訓に夢中になりすぎて深夜に帰り着いた際、母親に泣きながら滅茶苦茶怒られた事を思い出した緑谷はメモ帳やバックを背負いリュックに詰め込み、フード付きパーカーを着直すと全速力で家に向かって走り出した。

(努力や訓練ってこんなに楽しいものだったけ?)

緑谷は走りながらふと心の底から感じた充足感に、今までの訓練や努力を思い返す。虚弱体質の体では日々どんなに体を鍛えてもそれが成果として現れずに落ち込み、疲れが心身にたまる負の連鎖が続くだけだった。少なくともこんな心から充実したものではなかった。

自分の理想とした動きをパルクールの練習やマッシュアルーツの訓練を通して鍛え洗練させていく。以前より遥かに厳しい訓練でこんなにも充分した気持ち湧いてくるのは、以前までの自分では絶対にできなかったことができるからだろう。

今までヒーローになろうと必死に勉強して蓄えた知識をフルに活かし体を動かす度に自分の今までの努力が決して無駄なモノではないと思える。ステイブさんから力を託されたらこそそうやって以前の自分ではできなかった全力の鍛錬が、努力ができて

日々自分が成長している事を感じられるのだろう。

(ステイブさん…絶対に…なってみせます！ ヒーローに…！ 貴方の想いに応えてみせます)

緑谷は心の底から自分に力と盾を託してくれたステイブ・ロジャースに感謝しながら全力で走る。

全速力で走る事20分、海浜公園からあつという間に、自宅近くの街中まで着くとスピードを落としながら、夜の喧騒で賑わう街中を走る。さすがに街中の歩道を車並の速度で走る訳にはいかないからだ。

(このペースで走れば門限の10時前には戻れる、家に帰ったらご飯食べて、風呂入って、宿題を終わらせて、それから…！)

緑谷は突如凄まじい悪寒を感じ走るのを止め、すぐ近くにあるビルの間にある裏路地の前まで来ると暗闇に包まれた裏路地の奥を目を凝らして見つめ、耳を澄ます。

（悲鳴？ それもかなり焦ってる…何かに追われてるのか？ それにしても何だこの感じ…今まで感じたことがない）

常人では街中の喧騒で決して聞こえないであろう小さな悲鳴を超人的聴力で確かに聞いた緑谷は周りを見渡し人がおらず監視カメラの類も見当たらない事を確認すると、リュックの中から身バレを防ぐための顔全体を覆うマスクを素早く被り、フードを目元深く被り直し、シールドを装備すると迷う事なく暗闇に包まれた裏路地の中に向かって走り出した。

既に誰かが襲われている可能性が高く、ヒーローを呼ぶ間に連れ去れるか、手遅れになる可能性が高いと判断したからだ…それだけではなく力を託されてから初めて感じる凄まじい悪寒と胸騒ぎ、裏路地の奥から感じる『何か』の正体を確かめるためでもあるのだが…本来ならここでヒーローや警察に通報し、待つのが常識的に正しいだろう。ヒーローの資格を持たない者が個性を振るうのは如何なる理由があるかと犯罪行為だ。だが、ヒーローや警察が来るまでの間に手遅れになったら？ ステイプ・ロジャースから人を助けられる力を託されて、ヒーローになれると言ってもらっていないながら、力を託されていないが何もしくなくていいのか？ という思いが緑谷を突き動かした。

緑谷は緊張感を保ちつつ、裏路地にいる何かに警戒しながら走りだした。

「はっはっはあ！ 何なんだよあいつはああああ！」

薄暗い裏路地を一人の男が息をきらしながら必死に走り続けていた。男はこの街の裏側では名の知れたヴィランチームの一人だった、殺しや盗み、暴行、何でもやる筋金入りの悪党集団で運がいいのか、ヒーローや警察達から幾度となく逃げ続けているそれなりに名前の知られていたヴィランチームだった。自分達を止められる者など誰もいないと調子づいていた…だが今ではヴィランチームは壊滅し、その生き残りの最後の一人は必死に自分を追跡してくるモノから逃げ続けていた。

「ギ、ギギギ、ギギ！」

「ひ、ひひひひ！」

二メートル近くの間離れした巨体に灰色の体色、鈍い銀色のライトアーマーとマスクを装着し、戦棍と銃と刃が一体化したような武器、スタツフを装備した1体の怪物が黒い霧の中から突如現れてヴィランチームを襲い、男を残して全滅したのだ。男はチリ1つ残さず消滅した仲間達の姿に恐怖し、命辛々何とか逃げおおせているが、今も怪物が凄まじいスピードで後ろから追走してくる。捕まればかつての仲間達のようにあの武器でチリ1つ残さず消しとばされて殺されるという恐怖がチンピラを襲う。

「な…何なんだよおおおおー！ お前え！ 何で俺を狙うんだよおおおおー！」
「ギギギギギイ!!」

怪物は叫ぶ男を無視し、スタツフを走る男の足に向けて構えると銃口と思われる先端から青白い光弾が放たれ、男の右足を撃ち抜いた。

足を撃ち抜かれた男は短く悲鳴をあげながらゴロゴロと地面を転がり、余りの激痛に叫び、足の一部が抉れ血を流す右足を抑えてうずくまっている。怪物は地面にうずくまる男に近づき首を掴むと片手で軽々と宙高くまで持ち上げる、男は首を締められ息ができずに足掻く事しかできない。怪物はスタツフの刃を男の顔に向けて始末しようとしたその時、凄まじいスピードで飛来したシールドが男を持ち上げていた怪物の右手に直

撃した、怪物の手から離れた男が地面にどきりと落ちる。

「ギョ!? ギギギギギイ!!」

怪物はシールドが飛来し、反射するように戻っていった通路に向けてスタツフを構えると躊躇なく撃ち始めた。男の右足を撃ち抜いた時よりも出力が高いのか先程よりも大きい青白い光弾が放たれ薄暗い路地を照らす。青白い光弾が飛び交う中、シールドを装備し直した緑谷が光弾をシールドで防ぎながら怪物に向けて全速力で駆け出していた。

僕は目の前の光景が信じられずにいた。裏路地の中を駆け抜けて叫び声が聞こえた場所にたどり着いたら、明らかに人間離れた風貌の：異星人じみた外見のヴィランが、今にも武器と思われる杖を右足の一部が挟まれた男の人に向けて何かを：恐らく危害

を加えようとしている所を咄嗟にシールドを投げつけて阻止した。普通なら個性で外見を変えているか、異形型の個性ゆえの外見かと思うだろうが僕の体の中の直感に近い『何か』があれば人間では無いと、人を殺す事を躊躇しない怪物：倒さなければならぬ敵であると告げてくる。間違ひなくあの怪物が自分が感じた悪寒の正体だろう。

「早く逃げて！」

怪物が放つビームの様なものをシールドで防ぎ、避けながら地面を這いながら必死に移動する男に逃げるよう言うと一緒に怪物に向かつて肉薄する。未知の技術で造られた飛び道具を持っている上、どの様な能力を持っているかすら分からない以上様子見をしている暇ない、余計な行動をさせざるに制圧する！

「ギアギゲグギャギガアアアアア！」

怪物は僕を睨みつけ凄まじい敵意を此方に向けながら叫ぶ。ビームがシールドで防がれ、避けられ効果が無いと判断したのか、未知の武器に付いている青白い光を放つ刃で切りかかってくる。距離を取りながらビームを撃たれるよりかはむしろ此方の方が

都合がいい。振り下ろされた刃をシールドで正面から受け止め、鏝迫り合いの様な状態で一瞬拮抗状態になった、怪物も人間離れた凄まじいパワーで押し倒そうと力を込めてくるが、単純なパワーは此方の方が上らしく徐々に怪物を後方に押し返している。

「おおおおおおお！」

「ギギギギギイ!?!」

力負けをしている事に困惑する声を上げる怪物を一気に後方へ押し返し、体制をくずした所をシールドで武器をはたき落とし、金属のマスクで覆われた顔面に手加減無しに全力のパンチを叩き込む。怪物は吹き飛び、顔を覆っていた金属のマスクが外れ地面に転がる。殴り飛ばされた怪物はフラつきながらも素早く体を起こし、僕の足元にあるはたき落とされた武器を回収しようと凄まじいスピードで飛び出してくるが武器がない事に焦っているのか隙だらけだ、無防備な怪物に向けてシールドを投げ飛ばし、胴体に直撃させ再び吹き飛ばした。怪物は悲鳴をあげながら地面を転がる。今度は立ち上がれない程のダメージを負ったのか昆虫の様な口から紫色の血を流し、地面でうずくまっている。

「…………お前は一体なんなんだ?…」

「ギ…ギギ…」

昆虫と爬虫類が混じった様な異形の素顔に、紫色の血、ビームを撃つことができる未知の武器、明らかに普通ではない『まるでこの世界とは別の世界』からやってきた様な異質な怪物に思わず尋ねるが言葉が通じるはずもなく、怪物はうめき声を挙げている。人に危害を加えていた以上こいつはこのまま野放しにしとく訳にもいかない…警察やヒーローに捕まる事覚悟で通報してコイツの身柄を引き渡した方がいだろうか。この怪物は間違いなくステイブさんが言っていた『世界の危機』に関わっている。

「…………とりあえず警察とヒーローに連絡して。っ! 何だ!」

警察に連絡しようとしてスマートフォンを取り出そうとした時、突如怪物の周りを黒い霧が何処からか覆いはじめた。更に黒い霧は怪物の周りだけではなく徐々に辺り一面に広がり始めたため急いで後退し、盾を構え警戒する。

「…!! 消えた?」

裏路地一面を覆っていた黒い靄が徐々に消えてくと、そこにいたはずの怪物が消えていた。辺りを見渡すが怪物が持っていた武器も、怪物に襲われていた男の人も血痕一つ残さず初めから何もなかった様に裏路地から消え去っていた。

「一体何だったんだ…」

いつのまにかにか悪寒と胸騒ぎが止まっていたが、困惑と疑問だけが残った。

「使えねーなあ……この『チタウリ』とか言う奴。雑魚ヴィランチームを全滅させる事はできてねーし、たった一人のヴィジランテにやられるとか、こんなじゃまだ脳無の方が使えるじゃねーか」

「それは仕方ありません。『チタウリ』は本来軍隊を組み、指揮官の指示の元、連携をとり戦う事で真価を発揮する殺戮生体兵器と聞いています。たった一人でヴィランチームを全滅させる事ができるだけでも上々でしょう」

暗闇の中、2人の男が床に転がっている怪物：『チタウリ』を見下ろしながら話している。上半身の各所に掌をつけている男は『チタウリ』に文句を言い、そんな男を黒い霧の様な外見した男が宥めている。

「それにしてもあのフリスビー野郎……いい所で邪魔しやがって。あいつのせいで雑魚一人殺し損ねたじゃねーか……」

「あれはフリスビーではなく盾では……しかし乱戦なら兎も角1対1でそらのヴィジランテに倒される程チタウリも弱くはないはずなのです……動きもそらのサイドキックとは比べ物にならない程洗練され、チタウリ以上の身体能力……ただのヴィジランテで

はありませんね……」

「……まあいいや所詮コイツらは数だけならいくらでもいる雑魚キャラだ。性能テストもこれぐらいでいいかなあ。あとは連合の数を揃えるだけ……楽しみだなあ……雄英襲撃……！」

掌の男はニヤリと笑い、チタウリの頭を右手で鷲掴みながら笑った。左手に持つ穂先に青い宝石が付いた槍を眺めながら、ポロポロと体が崩壊するチタウリの悲鳴を気にもとめず、いずれ行う予定である雄英襲撃を心底楽しみに、心待ちながら呟いた。